

浪江の こころ通信

・第17号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第17号への
感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4218



ありがとう ございました



成田商工会議所様から東日本大震災復興支援チャリティゴルフ大会(110名参加)での会費とカンパ金からの義援金が届けられました。



日本ボランティア会議様から義援金が届けられました。



練馬区歌謡祭実行委員会様から義援金が届けられました。



本田技研様からミニ耕運機を寄贈していただきました。本宮市の高木仮設住宅自治会の皆さんにご利用いただいています。

スポーツで元気に

10月6日、二本松市岩代運動場で浪江町長杯ソフトボール大会が開催されました。

県内外の避難先から選手が集まり、全8チームが頂点を競い合い、久しぶりの仲間とのプレーを楽しみました。結果は次のとおりです。

優勝 クララーズ
2位 S S B
3位 マスコエンジェルス
井手スポーツクラブ



10月9日、二本松市城山総合グラウンドで町長杯グラウンドゴルフ大会が開催されました。

グラウンドゴルフ愛好家ら57名が参加し、仲間との再会を喜びながら元気にプレーしました。

結果は次のとおりです。
(敬称略)

☆男性の部

優勝 青田 宗夫(権現堂)
2位 愛沢 精一(田尻)
3位 梅津 義雄(津島)

☆女性の部

優勝 池田スミ子(津島)
2位 佐藤トシ子(立野)
3位 谷田 温子(酒井)

還暦のアスリートたち



10月6日～8日の3日間、あいづ球場などを会場に第11回福島民友旗争奪福島県還暦軟式野球選手権大会が開催され、浪江町から浪江クラブ(渡部俊夫監督)が出場し、準優勝という素晴らしい成績を収めました。

同クラブの皆さんは、大会までの間わずか2回の全体練習とそれぞれの避難先での個人練習を経て遠くは大阪から大会に挑みました。

監督の渡部さんは、「あきらめかけたときもあったが、みんなの強い熱意に後押しされた。楽しく野球ができることは幸せ。来年も優勝目指して一層がんばりたい。」とお話していただきました。

また、同クラブは、9月28日から岩手県奥州市を中心に開催された第14回全日本選抜還暦軟式野球大会においても、ベスト16の成績を収めています。





高野 里美さん(西台)

取材者：茨城NPOセンター commons 小原・白土
取材日：10月13日

なんとか頑張ってます

今年の8月に日立に越したばかりの高野さん。
旦那さん、娘さん2人と一緒にアパートで笑顔あふれる暮らしをしています。



▲お姉ちゃんのお嬢ちゃん、妹の優愛ちゃん。
浪江といえば？と聞いたら、「なみえ焼そば」
だって。

■気持ちに余裕ができました
浪江町では夫と同じ工場に勤めていて、震災のときも働いている最中でした。震災が起きた直後は津島へ避難し、そして福島市に避難しました。そのあと北陸工場のある石川県に移り住んだのですが、まったく知らない土地での言葉や生活文化の違いに戸惑いもあったし、親戚が関東に住んでいたため、今年の8月に日立に来ました。
夫が今までと同じ業態ですぐに仕事が決まったので、安心しました。私自身も、福島にも近くなつたし、日立での生活環境が良いので気持ちに余裕がで

きました。
浪江町で元の暮らしができるのならいいです。住んでいたころは、不便だし田舎だと思っていたけれど、思い返すと住みやすかったなと思います。必要なものはそろっていたし、慣れ親しんだ土地だから。安心して散歩もできました。
両親も浪江町に住んでいたので行ってしまいました。それができなくなってしまうので子どもが寂しがっています。
両親は今群馬に住んでいて、私たちが石川にいたころは行き来にも時間かかっていたんです。今はそれよりは近くなつたので、たまに遊びに行っています。

ただ、やはり日立は福島に近いので、放射能の影響が心配ですね。子どもが将来結婚したり、子どもを産んだりするときに、相手の親御さんに何か言われやしないかって。福島にいたことをあまり堂々とできないのは辛いです。
■大きくなってみんなに会えるって伝えていきたい
私はずっと浪江町で暮らしてきたので幼なじみがいます。でも、子どもたちにはいないんです。幼なじみができる前に離れることになってしまったから。
でも、上の子は当時小学2年生だったのでお友だちと今も文通をしています。会津で夏休みをやった浪江小のイベントでも、懐かしい友だちを見つけてすぐに表情が明るくなりました。時間が経っても子どもはすぐ仲良くなるんだなって。
下の子はまだ小さいので、震災のこと自体を忘れてしまうかもしれない。けど、子どもたちには浪江町のことを忘れてほしくないし、大きくなってみんなに会えるのだということを伝えていきたいと思っています。



安部 一さん(北幾世橋)

取材者：NPO法人とちぎボランティアネットワーク 徳山
取材日：9月22日

風薫る彼の地に思いを寄せて

安部さんは、昨年の4月から栃木県下野市で生活しています。年齢の割に若々しく元気な印象の方です。奥さん、長男、弟さんと同居し、そして近くには子どもたちの家族もお住まいです。

■風薫る彼の地に思いを寄せて
昨年の3月11日の地震前の凄まじい地鳴りの音や、地震の揺れ方はそれまでに経験のない激しいものでした。
現在の家は平成になって新築したので倒壊の心配はありませんでしたが、以前の家だったら倒壊していたのではと思います。
防災放送やテレビでこの大震災の状況と、原発の事故を知り原発避難者となりました。親類を頼り数カ所に渡り避難しましたが、長男の会社の関係により栃木県下野市で生活することになりました。
下野市のボランティアや市役所の方々が「私たちにできることはないか。」ということや、気軽に集まって話ができる場所を作ろうということになり、昨年6月から月2回のお茶会を開催していただき、さまざまな情報提供や情報交換をして支援をいただいています。下野市には123名が避難していて、南相馬市と浪江町の方が多いです。
私が震災前に住んでいた幾世橋は田園地帯で海にも川にも近く、新緑の芽生える季節はまさに「風薫る」という言葉が当て

はまるどころでした。
避難地の甥たちが避難生活の長期化に伴い、昨年9月に従兄会を飯坂温泉で催してくれました。従兄会でさらに絆を強くし、各々の復興再生に立ち向かうことを誓い合いました。
いま非常に残念なことは、放射能汚染により、明治以来100年を超す「泉田川の鮭増殖事業」が途絶える危機にあります。個人的には終の棲家を追われ、家族で長年営んできた田畑も今は手入れすることもかなわず荒れ果て、先祖の眠るお墓も崩壊したまま放置状態だということです。一日も早い原発事故の収束と除染を早急に行なってほしいです。
避難生活も長期になってきています。避難生活が長期になればなるほど避難区域が解除になつたとき、帰ることを悩む人が多くなることを心配します。私は残念ながら若くはありません。私は家族や自分のことを思うと悩むことはたくさんありますが、健康な体のうちに浪江に戻り、震災前のあの風景や生活を取り戻せたらと思っています。





川島 美幸さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 阿部・古山
取材日：10月12日

悪いことばかり考えても仕方がない、不安の中からも良いことを探そう

現在、福島市内の借上げ住宅に中学1年生の娘さんとお父さんと3人で暮らしています。

まもなくオープンする「おうちカフェ凜」(飯坂町、スーパーいちい並び)の準備のため、忙しくしていらっしゃいます。

■とにかく、動いていました
地震当時は新町のまちづくり会社東遊紀の事務局をしていました。まず私のお店の様子を見に行き、それから急いで娘の通う小学校に向かいました。保護者の方たちと子どもたちを校舎の3階に誘導する手伝いをしました。その後、自宅に父を迎えに行き、今度は中学校に避難しました。電気もなかったので、地元の方が持って来てくれた自家発電機はとても助かりました。そこでは、商工会女性部の方々と避難者リストを作成しました。明け方に白い防護服を着た警察の人が来て、とにかく避難してくださいとの指示を受け、津島を目指しました。避難した体育館でも、15日の朝まで誘導などの手伝いをしながら、もうここで死んでしまうのかなという思いが頭をよぎりました。

それから、福島青年会議所会館(福島市)に避難しました。そこでも緊急物資を新地やいわきに搬送する手伝いをさせてもらいました。
二次避難で猪苗代に移り、昨年の7月までお世話になりました。すでに津島中学校、浪江高分校も、つしま活性化センターも人であふれ、ようやく空いていた南津島上集会所で10人前後で室内の掃除をしたり、炊き出しをしました。地元の区長さんが米や野菜を差し入れてくださり、本当に助かりました。
■「新幹線の車内で悲しい思いをしました」と知恵子さん
15日は水戸に行く予定でしたが、ガソリンが少なく、那須塩原辺りに避難しようと走っていたときに、郡山で買い求めた携帯電話でようやく東京に住む娘や千葉の息子と連絡がとれました。息子の提案で、白河でスクリーンングを受け、那須塩原駅に車を置いて新幹線で行くことになりました。4日間も着の身着のまま乗ったものですから、乗客の方々が私たちと距離を置きたがっているのを感じ、悲しくなりました。
千葉の息子や娘の嫁ぎ先の実家に世話になり、4月5日に25日ぶりに自宅へ犬の様子を見に行くことができました。役場の情報を頼りに、犬を連れて夫の車と2台で向かった針道小学校で二次避難所を知り、14



定休日 日曜日
時間 10時~17時
素敵な器でおいしいコーヒーでおもてなしをします。小さなお子さま連れのお母さまもお越しく下さい。お子さまが喜ぶ絵本なども用意しています。

▲まもなくオープンの「おうちカフェ凜」で。



早川 弘さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・阿部
取材日：10月11日

ももには戻れないけれど、前を向いて歩こう

本宮市荒井の恵向仮設住宅はペットが飼えるゾーンがあり、常に一緒だった老犬のために選んだそうです。その愛犬は今年4月2日に亡くなりましたが、「まさに、私たちがかすがいのようなのですが、今は夫婦二人の時間を大切に過ごしています。」とお話ししてくださいました。



▲お二人並んで笑顔でくださいました

■震災直後の数日間
3月11日は仕事で権現堂の現場に出ており、発生直後、車を取りに会社に戻った後、直ぐに自宅に帰りました。妻は夕方から出かける予定があり、身支度をしている最中でした。夜は電気だけは通じていたのでごはんを炊いて、我が家を頼って来た妻の兄たちや妹夫婦とともに過ごしました。
妹の車にはガソリンがなかったため、一緒に4人で室原から津島を目指しました。ほどなく帰宅できるだろうと毛布を1枚ずつしか持たなかったし、年老いた犬は自宅に置いたままです

たが、それでも休まず動いていました。動いていないと病気になるってしまいましたが、炊き出しの手伝いや、青森まで焼そばを焼きにも出かけました。また、全体の資格を持っていたので近所の小川病院さんでリハビリの手伝いもしました。病院には浪江から避難している方々も多く来られ、互いにお話をしながら励まされました。
■たくさんの人に出会い、助けられました
避難してきた友だちと始めるカフェのオープンに向けて、1からスタートです。今は、辛さ半分、嬉しさ半分の気持ちです。今までお世話になった人たちが、つながっていたいという思いで、大堀相馬焼協同組合やいろいろお世話になった方々にお願いをして準備をしています。さらに味自慢のコーヒーは、猪苗代の方から紹介していただいた群馬の専門店から仕入れていきます。娘が一番の応援者であることがとても心強いのですが、県外に避難したほうが良かったのかもしれないと思うこともあります。放射能の身体への影響がや

日から約5カ月、ペットと過ごせる磐梯町の七ツ森ペンション村「こりす」にお世話になりました。その後、この恵向仮設に9月初めに移りましたが、病气だった愛犬は7カ月後に息を引き取りました。
■「愛犬が、二人一緒に時間を作ってくれました」と弘さん
妻が習っていた大熊町のカラオケの先生が津若松に教室を開いたので、妻を送り迎えするうちに、先生の歌を聞いて私も習うことになりました。10月5日には発表会があり、その様子は地元新聞にも大きく取り上げられました。
上ノ原は隣近所がとても仲が良かったのに離れ離れです。妻はとても寂しいようですし、家のことをするのが好きなので、快適な住まいを望んでいます。浪江の町や私たちの将来のことが決まらなければ動くに動けません。「今は仕方ないよね。」と笑いながら、前へ進むしかないですよ。

はり気になり、自分で確認するために、娘が口にする物は二本松まで測定に出かけています。さらに、家の周りも線量が高めなので、登下校も車で送り迎えしています。娘は合唱部で頑張っています。今につながるいい出会いもたくさんありましたし、私も前向きでいようと思います。これからも、多くの人とつながりながら、輪を作っていきたいと思っています。



小松 雄次さん(川添)

取材者：NPO法人くびき野サポートセンター 野本・竹内
取材日：10月21日

浪江の思い出は人とのつながり

小松雄次さんのご家族は、現在新潟県柏崎市の借り上げ住宅で避難生活を送っています。ご本人は平日福島に戻り以前の仕事を続け、週末になるとご家族に会いに戻る日々を送っています。

震災発生時、私たち夫婦は福島第一原発に勤務していました。家族の安否を確認しようにも電話は通じない状況。とにかく長男と次女の通う小学校へ向かいました。子どもたちと合流し、7時ごろ自宅へ到着。家の中はめちゃくちゃでしたが、両親と長女は無事でほっとしました。翌朝から避難指示でしたが、津島の農協に避難しましたが、避難区域の拡大のため他の場所を探すことに。2台の自動車各地を転々としている間にガソリンが切れてしまい、1台を乗り捨てなくてはなりません。情報源はラジオのみ。不安感が募りました。避難生活の疲れから父や長男が体調をくずしてしまい困っていたところ、泉崎村の親戚がうちに来るようにと声をかけてくれました。ここでやっと落ち着いてこれからの仕事のこと、子どもたちの学校のことなどを考える余裕ができました。

新潟県に仕事のアてや子どもたちの編入先が見つかり、4月12日に柏崎市の借り上げ住宅に引越すことが決まりました。新たな土地での生活は不安がなかったわけではありません。私たちが受け入れてくれる心配で、ふさぎこみがちな子どもたちがこちらの学校になじめるか心配でした。しかし柏崎市の人々は中越沖地震の経験から私たちが被災者の気持ちをよく理解してくれて、とても親切に接してくれました。子どもたちも時間ばかりでしたが今の生活になじみ、避難先の住宅で新しい友達と楽しそうに遊んでいます。長女は吹奏楽、長男は剣道、次女はピアノに打ち込み、日々を過ごしています。



▲後列：左から長女の結衣さん、次女の茉結さん、おばあちゃんの波子さん、奥さんの房子さん
前列：左からおじいちゃんの洲三さん、長男の颯太くん、雄次さん



柴 陽子さん(請戸)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 大内
取材日：10月6日

先は見えないけれど、それでも今は頑張っていくしかない

現在、ご主人の政一さん、長女遥香さん(中2)、次女康羽さん(小6)と、隣にはご両親、そして弟さん家族が同じ棟で暮らしている。



▲陽子さんと次女の康羽さんと仲良く一緒に。

子どものお迎えにそろそろ学校に行かなければいけないと思っていた矢先、地震が起きました。私はすぐに子どもたちの元へ。漁師の主人は海の様子を観て、船ですぐに津波をかわして沖に出られたため、助かりました。タイミングが悪かったら、どうなっていたか解りません。娘たちは、上着を着る間もなく上履きのままで学校から大平山に行き、さらに山を越えて避難場所へ。足が不自由な康羽は学校のみなど一緒に行くのは無理なので、私とともに行動し

ました。夕方ようやく遥香と役場で合流し、隣の体育館で一晩過ごしました。車中で一泊するなど大変な思いをしましたが、両親や弟家族も含め総勢12名で千葉県四街道市の叔父の家を頼りに避難してきました。その後、市役所が用意してくださった現在の社宅に移りました。ここは1棟が空き家になっていたこともあり、両親、弟家族、私たち家族それぞれがこの同じ棟に住むことができました。他にも福島から避難して来た人たちが住んでいます。1階には支援室があり、月に1回お茶飲みをしながら、おしゃべりをしています。

今、遥香は友だちもでき、部活の吹奏楽部でサクソスを吹いています。しかし、請戸小でやっていたソフトボールがやりたかったのでしようね、高校ではソフトボールをやりたいと言っています。康羽は、友だちはできたものの、まったく新しい環境のため、一時的に視力と足の状態が悪化し心配しましたが、今は体調も戻り友だちの家に遊びに行ったりしています。

私は市役所の紹介でイトーヨーカ堂の鮮魚コーナーで働いています。請戸では、獲れたての魚を食べていたので、高い値段のついた魚が並ぶ様子にびっくりする毎日です。主人も紹介していただいた会社で働いていましたが、漁師だった主人にとって、陸の上でいったい何ができるのかと葛藤があったのでしよう、今は新しい仕事を探しています。今、伝えたいのは、大変な捜索の最中にも関わらず、自衛隊の方がランドセルと学校で使っていたものを持ち出してくれたことへの感謝の思いです。津波ですべてなくなってしまう中での唯一のものであります。

請戸では一緒に暮らしていて、今は二本松に二人でいる主人の両親が気になりますが、現状では、子どもを連れて帰ることはできません。しかし浪江のことはいつも心にあります。主人と話しているのは、いずれ漁を再開してお世話になった人、友人、知人に請戸のおいしい魚を届けたいということです。そして先の見えない中でも、頑張っていくしかないと思っています。



藤田 泰夫さん(権現堂)・小林ヨシノさん(川 添) 半谷千代子さん(酒 田)・村形 孝子さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：10月11日



東京都

東京の東雲で、支えあって暮らしています。

東京都江東区東雲にある東雲公務員住宅には、福島県から1,250名もの人たちが避難し暮らしています。うち、浪江町民は約300名。江東区の後押しもあり、避難してきた住民の交流などを目的にした自治会組織「東雲の会」が昨年9月に設立され、「しののめサロン」など、さまざまな活動に取り組んでいます。

■浪江にいたころの暮らし
〈藤田さん〉

私は浪江町で32年間、寿司屋をやっていました。地元、請戸漁港から仕入れた魚は獲れたてで、絶品でした。二人の息子も修行から帰って来て、家族経営の店として、地元町内からたくさんの人たちが来てくれていました。

〈小林さん〉

私は、魚屋で働いていたから、活きのいい魚ばかり食べていたので、避難して来てからは魚が食べられなくなりました。

〈村形さん〉

夜ノ森公園や請戸川リバーラインの桜はきれいでした。花火も打ち上げられて、季節の楽しみになっていました。

■避難して来て

〈藤田さん〉

避難して来た当初から今まで、江東区や近隣の住民の人たち、企業からさまざまな支援を受けることができ、本当にありがたかったです。衣類や野菜といった食品や日用品から、歌舞伎の

チケットなど、寄付してもらったものを分配するのも「東雲の会」の役割。避難生活も長くなっ

■今の暮らし
〈小林さん〉

今は、息子たち夫婦と3人の暮らし。私は仕事をしていないので、図書館に行くのが楽しみ。でも、エレベーターが苦手で、たいていは23階から歩いて下まで降りてきます。

〈半谷さん〉

私は、嫁と4人の孫と一緒に暮らしています。息子はいわき市で働いています。ここは、近く



▲前列左から 小林ヨシノさん、半谷千代子さん、村形孝子さん
後列左から 大坊雅一さん、藤田泰夫さん

にスーパーや病院があり、とても便利な所なので暮らしやすいです。

〈藤田さん〉

「東雲の会」の活動は震災で、ここに避難してきているすべての人たちを対象にしています。「無理強いはせず、来るものは拒まず」です。毎週火曜日と木曜日に開催している「しののめサロン」では、手芸教室や体操教室をやったり、「ハンドマッサージ」のボランティアの人に来て

志を募って、ゲートブリッジ下の若洲公園に店を構え、かき氷や生ビール、からあげなどを作って販売しています。土日は結構なにぎわいになるんですよ。

■今後のこと

〈半谷さん〉

浪江に帰ることは半ば諦めています。浪江に帰ることは半ば諦めています。浪江に帰ることは半ば諦めています。

〈村形さん〉

息子の嫁が、こちらに来てから出産。今は、夫と息子夫婦と孫3人の7人暮らしです。東京は生活するには、便利な場所ですが、やはり、山が見え、田んぼに囲まれ、季節の変化が感じられた以前の暮らしが懐かしいです。浪江に帰ることはできません。浪江に帰ることはできません。

〈小林さん〉

息子夫婦は、東京で新しい仕

事を見つけてことができました。慣れない高層ビルでの暮らしはたいへんですが、息子夫婦と離れて、私ひとりで暮らすことは考えられません。家族一緒に暮らせる道を選ぶことになると思います。

■浪江のみんなへ

〈村形さん〉

思い出ばかりで生きていくのは、どうかと思います。でも、踏ん切りがつかえません。先の見えない中で、ああしよう、こうしようとは言えません。一人ひとり状況が違います。どこに住むかは、それぞれの判断です。でも、希望を捨てないで頑張っていけたらと思います。

お詫びと訂正

「浪江のこころ通信第16号」に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
27頁 山田愛梨さんの写真キャプション
(誤) 左から愛梨さん、おばあちゃんの芳子さん、弟の悠愛くん
(正) 左から愛梨さん、おばあちゃんの琴子さん、弟の悠愛くん